紅梅

與謝野晶子

青空文庫

私の庭に早咲の紅梅が一本ある。東と南の光を受けて、北を建物にふさがれてゐるためか、十二月の半からぼつぼつ蕾を破つてゐる。色は桃のやうに濃くも無く、白い磁器の上に臙脂(べに)を薄く融かしたやうな明るさと可憐さとを持つた紅である。私は歳末から此の歳端へかけて快晴がつづくので、毎日一度は庭へ下りて、霜解のあとの芝生を踏んで歩き、友人を訪ふやうな心持で落葉した木木を見上げ、最後に此の紅梅の傍へ來て暫く立つてゐる。そつと枝を引き、脊伸びをして一つの花を嗅ぐこともある。ほのかながら心に徹する清い香である。支那の詩人が「寒香」と云つたやうな好い熟語の我が國語に無いのが惜まれる。東坡が紅梅を詠じて「寒心未肯隨春態、酒暈無端上玉肌」（寒心未だ肯て春態に隨はず、酒暈端無く玉肌に上る）と云つたやうな妙句は、我國の歌にも新しい詩にも見當らない。併し東坡の心には酒があるので、紅梅を見ても微醺を帶びた仙女を聯想したが、私には此の冬枯の庭にある木のなかで、此の紅梅だけが明けて十一になつた末の娘のやうな氣がする。貧しい中に育ちながら、末の娘は品好く生長してゐる。私達の子供の中で此娘だけが文學的である。細やかに痩せて、よく風を引いて熱を出すやうな體質は氣遣はれるが、氣立の優しいのと、讀書と創作が好きで、豐富な空想を持つてゐるのとが、本人自身を樂ませてゐる。早く親に別れる運命を持つてゐて物質的には苦むであらうが、その文學的であることが、人知れず一生の慰安となるかも知れない。正月二日のはげしいから風で紅梅が大分吹き散らされた。さうして末の娘はその夕方から熱を出して寢

てゐる、私は今朝も娘の寢臺の傍で人から來た賀状を讀みながら、猶をりをり窓越しに紅梅を眺めてゐる。

（一九二九・一・二）

青空文庫情報

底本：「定本　與謝野晶子全集　第二十巻　評論感想集七」講談社
　　1981（昭和56）年4月10日第1刷発行
入力：Nana ohbe
校正：今井忠夫
2003年12月15日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

紅梅

與謝野晶子

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/